

積極型冷え症(裏寒証)のアトピー性皮膚炎における人参湯の有用性について

富士ニコニコクリニック 院長 渡邊 善一郎

キーワード

- アトピー性皮膚炎
- 裏寒証
- 人参湯3兄弟
- 入浴診断

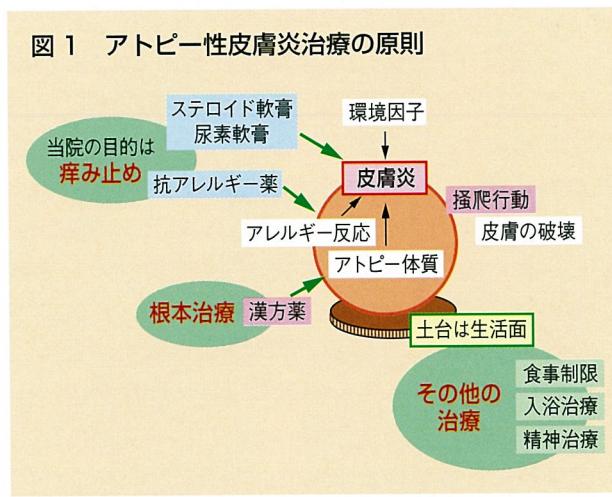
冷房や冷蔵庫が普及している現在の冷え冷え社会においては裏寒証が原因の病態も多い。その中に難治性アトピー性皮膚炎もあり、表熱裏寒の形をとり、古典では見られなかった若者にも多く認められる。裏寒証を診断するには入浴診断法(入浴中軽快・後悪化)が有効であり、治療も一時的な効果だけの清熱薬ではなく、本治の温裏薬も用いるべきで、人参湯も有効な処方の一つとなる。

はじめに

アトピー性皮膚炎は治療に時間を要するが、治癒可能な疾患である。

アトピー性皮膚炎は身体のバランスが失調し、その結果として皮膚に病変が現れた病態と考えられる。よって当院における治療は身体のバランスを治す漢方治療が主体であり、皮膚に対する軟膏治療はおまけであり、抗アレルギー薬とともに痒み止めとして用いている(図1)。

図1 アトピー性皮膚炎治療の原則



当院におけるアトピー性皮膚炎治療のエキス剤を表に示す(表)。

人参湯(理中湯)について

今回は陽虚のアトピー性皮膚炎に用いる人参湯について述べる。

処方単位の解説では虚証で、胃腸に冷えを認め、

表 当院におけるアトピー性皮膚炎治療のエキス剤

湿盛	ジクジク	胃苓湯・茵蕪蒿湯・越婢加朮湯
丘疹	ボツボツ	半夏白朮天麻湯(湿痰)・猪苓湯(燥痰)
熱盛	炎症紅斑	黃連解毒湯・白虎加人參湯・防風通聖散
風盛	カイカイ	十味敗毒湯・清上防風湯・消風散
熱血	炎症出血	三物黃芩湯・黃連解毒湯・竜胆瀉肝湯
肥厚	苔癬瘀血	桂枝茯苓丸・治打撲一方・通導散
血虛	カサカサ	當帰飲子・十全大補湯・人參養榮湯
陰虛	テカテカ	六味丸・滋陰降火湯・溫經湯
陽虛	冷え冷え	人參湯・附子理中湯・牛車腎氣丸・大防風湯
気虛	元気なさ	補中益氣湯・黃耆建中湯

身体が疲れやすい「裏寒虚証」に用いるとしている。

私は処方を理解するのには生薬単位の組み合わせから考へるので、温中回陽・散寒の乾姜を主に調中緩急の甘草を加えた乾姜甘草湯を基本に中気益氣の人參を加え、さらに燥湿健脾の白朮(蒼朮もある)を追加した方剤が人参湯(理中湯)であり、温中散寒に働くと考えている。

傷寒論弁霍乱病脈治第十三に記載ある理中丸の加減法に、「臍上が動悸する者は腎気が動くため朮を去し桂を加え、腹中が痛い者は人參を多く用い、寒がる者は乾姜を多く用い、腹満の者は朮を去し附子を加える」と記載がある。つまり病態により臨機応変に加減して用いることが理解される。

白朮は味甘苦・性温で補脾益氣(補脾)し、化湿に働き、蒼朮は味辛苦・性温で芳香發散と燥湿作用により脾の運化機能の改善(運脾)に働くが、実際に生薬を味わってみると白朮の方が蒼朮より芳香性が強く苦味が強く發散性を感じる。これで芳香苦味健胃薬に働くと考えられる。

クラシエ薬品には人参湯の関連方剤として桂枝人

参湯・附子理中湯の「人参湯3兄弟」がある。桂枝は表の太陽膀胱經の陽気を巡らし、附子は經脈（裏の陽気）を巡らすと考える。

症例

21歳女性 アトピー性皮膚炎

4年間皮膚科にて軟膏治療を受けるも、軽快悪化を繰り返していた。夏場の冷房により皮膚炎悪化、特に顔の皮疹・熱感が悪化したため受診した。

赤鬼仮面様皮膚炎・鼻三角蒼白サインが認められた（図2）。

図2 アトピー性皮膚炎の症例

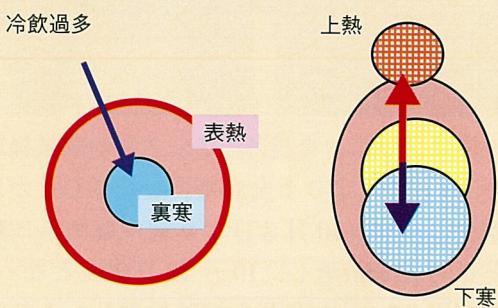


冷緑茶多飲、腹診にて心下から胃部圧を認め、便通先硬後軟・脈弱軟・舌淡白膩苔、自覚冷えなく・他覚的冷えを認める。皮膚炎は入浴直後で悪化・後期に軽快・入浴後は悪化した。弁証は裏寒表熱証と考え、クラシエ薬品の人参湯6.0gと少量の黄連解毒湯2T（赤みの強い時）を処方した。経過は服用1カ月後に軽快した。

考察

現代社会は冷房・冷蔵庫の普及により冷え冷えである。そのため裏寒表熱の病態となるが、熱は上に寒は下に向かう性質のため、上熱下寒（陽虛上浮）の皮膚炎を多く認めるようになる（図2）。

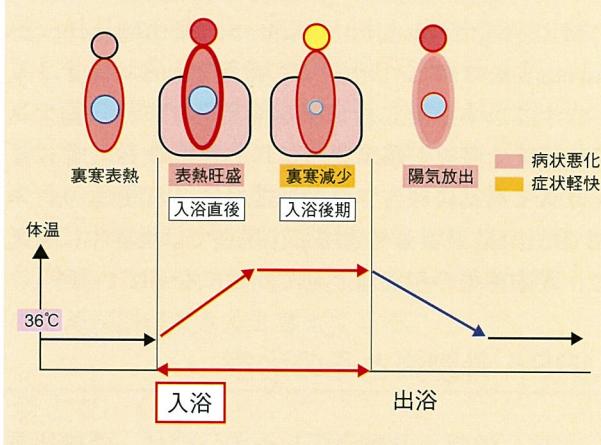
図2 上熱下寒



その特徴は顔面赤く、鼻蒼白、体幹の皮疹は少ない。教科書的には古典の陽虛上浮（真寒假熱）は老人などでみられる陽氣衰退の病態で「頬がほんのり赤みを帯び、四肢が冷え、温かい物を好む」とある。しかし現在の若者の陽虛皮膚炎では顔面に強く発赤し、積極的に冷飲・冷房・薄着を好む。強寒による陽氣損傷で、陽氣の変位であり、古典での真寒假熱とは病態が異なる。これら裏寒表熱証に清熱薬を使用するなら一的には軽快しても、再燃を繰り返し難治性皮膚炎に移行させてしまう。また他覚的冷えを認めて、冷えを自覚せず、多くは入浴も短時間である。これは入浴直後には表熱のため熱く感じる。しかし時間をかけた入浴にて身体の芯まで温めれば、気血の巡りが改善するので症状（搔痒・発赤）は改善する（図3）。

私は以前より入浴診断法にて簡便に裏寒証を判断できると報告してきた¹⁾。

図3 入浴診断



まとめ

社会的環境の変化で病態も変化することは古典より知られている。

温暖化の現在、日本の夏は冷房により冬の状況をつくり、逆に冬中でも冷飲食を摂取しているため、裏寒証（冷え症）が潜在的に増え、新しい病態を呈していると考える。これらの治療に人参湯類は有効な方剤である。

参考文献

- 1) 渡邊善一郎：真寒假熱（裏寒表熱）証に対しての入浴診断の有用性、日本東洋医学会第62回関東甲信越支部学術総会、2006.